

---

# 路傍の蕃茄(トマト)

平山海人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

路傍の蕃茄<sup>トマト</sup>

### 【Nコード】

N16960

### 【作者名】

平山海人

### 【あらすじ】

ある住宅街の路傍に植えられた蕃茄<sup>トマト</sup>。それはそれを育てているおばあさんの生き様を象徴していた。役場に勤め始めたばかりの関本佑は、そのトマト畑を立ち退かせるよう上司から命じられる。しかし、おばあさんは波瀾万丈の過去を聞き、佑は自分の歩みを考え始めるのだった。

朝ドラのイメージを想定して書いています。お暇な方は、キャステイングには以下の方を想像しながらお読みください。

関本佑

水嶋ヒロ

おばあちゃん

中村玉緒

荒井課長

小林すすむ

## プロローグ

美しきものを慕うは人の常。

野百合の可憐さに人は心を奪われ、おもわず足をとめる。

されど、路傍の蕃茄トマトになど、誰が立ち止まって目を留めようか。たとえ、それが大事に育てられたものであるせよ。

誰しも自分の人生は百合のように華やかでありたいと願う。一度しかない人生、路傍のトマトではあまりにも夢がない。とはいえ、路傍のトマトにもそれなりの味わいがあるということを知らない人はあまりに多すぎる。

これは決して華麗な百合ではなく、まさに路傍に植えられた蕃茄のような人生を送った一人の女の物語である。

## 第一章

「いったい、誰がこんなところに許可なくトマトを植えたんやろ？」市の環境科の係長は思わず口にした。

最近こそモダンな住宅が増え、それに便乗して新たなスーパー、病院、公園、マンション、しゃれたケーキ屋やレストランができた。めた急行が辛うじて止る小さな街のことである。

この街は五十年前頃から開発が進められた。関西きっての実業家、小林一三が造り上げた、電車の線路を引いたところに町をつくと

いう阪急電車の発想をそのまま体現化したような街である。その街には、小林一三の思惑通りに、大阪方面、京都方面に仕事を持つ若い家族がこぞって入居した。決まって、平の凡を地で行くような人々である。しかし、その世代も現役を終え、その子供たちはどこかへ行ってしまつて最近では昼間でも人の声さえ聞こえぬような静かな所になつてしまつた。だが、この四、五年駅前を新しくしたことで、この街がにわかには潤いを取り戻しつつあつた。

さて、そのトマトは、私有地でもなく、道でもないところに植えられていた。この街はそもそも車道も地元の私有地のすき間を縫うよう敷かれたため、車は運転しづらいただけでなく、歩行者もまことに歩きにくい。おまけに、昔からの灌漑用の幅二メートルほどの水路が街の真ん中を走っている。トマトはその灌漑の土手と車道の路肩とのわずか半メートルもないような長細い隙間に植えられていた。

「まあ、こんなにようけ……」係長はため息ともつかないような声で言った。今朝、市の環境科に寄せられた苦情により検分に来たのである。

長さにすると十メートルほどの細長い空間が、きれいに草が抜かれ、土地を肥やすための土が入れてあつた。そこに、整然と小粒なトマトが青々と育つていた。

「誰の迷惑になつてるわけでもなし、こないなことに、なんでいちいち電話してくるんやろ。でも、この土地は市の所有地やから、無視する訳にはいかな。さっそく、明日関本君に事に当たらせよか」係長はそつつぶやくとそそくさと係の作業車に乗り込んで走り去つた。

## 宮仕えも楽じゃない

翌日。

関本佑は焦っていた。町の環境科に勤務し始めて約二ヶ月。もちろん、子供の頃からの夢がかなって、大阪の小さな役場の環境科に入った訳ではない。

大阪の私立大学を卒業して、自分が本当に好きな事をやりたいというよりは、一番手堅く、実現可能な仕事に就いた。それが、唯一負け組にならない方法だと思っていた。だが、ここ二ヶ月仕事をして、どうもこの仕事は自分が思っていたよりはるかに退屈だということに気づいた。

「つまり、これは土地の苦情係やな」佑は思った。土曜日の昼頃やっている落語家の仁鶴が近所のもめ事の相談に乗る番組が頭に浮かんだ。なんとなくすっきりしない気持ちをおさえながら仕事に通っていた。

「あかん、また遅刻ぎりぎりや」環境科のタイムカードを7:59で押したのを確認した。

「おはようございます」佑が長身を少しだけ曲げて、中に入った。

「おっ、やっとときおった」係長が振り返ってこっちを見た。

「君にさっそく頼みたいことあるんや」小太り丸めがねの荒井係長は言った。

「はい。なんですか？」

「あの青山二丁目に土手あるやろ。あそこの土手と道の端にトマト植えてる人がいるねん」

「トマトですか？」 佑は鞆を机に置きながら聞いた。

「そいでな、関本君が行って、その植えている人に忠告してほしいねん。ここは町の所有地よって、植えたらいけませんって」

「またか」 佑は心の中で仁鶴の顔がよぎった。しかしつとめ顔は出さずに「分りました」と答えた。

佑は市の環境科の作業服に着替えると、係長から車のキーを預かった。

「トマトを道ばたに植える人ってどんな人かな？ 近所の人には違くないやろけど」 などと考えながら、車を走らせて十分もしないうちにその場所についた。

そこは用水路を挟んでこちら側とあちら側では行政区が違う。用水路のこちら側は町、向こう側が市の管轄になっていた。その問題の場所の真ん前には、この街の最近の近代化に取り残されたようなあばら屋が連なっていた。この街の中で完全にその空間のみが別の世界を形成していた。

着いたとき丁度、歳は八十過ぎと思われる小柄な女性が例の”トマト園”の手入れをしているところであった。「丁度、本人がいてくれたら手間が省けるわ」 佑は心の中で思った。

「おばあちゃん、よう精が出るね」佑は話しかけた。

「そーや、ちゃんと手をかけてやらんと、そたたんからね」草を抜く手を留めずに答えた。近くでみると、そこには小さい草の一本も生えていない。

「あんた、たれ？役場の人？うちはチャンとせいきん払うとるよ」

おばあちゃんはどこの人？

「いえ、環境料の者です。今日はおばあちゃんのその畑のことでちよつとよらしてもらったんです」「このおばあちゃん、なんか変な発音やなと思ひながら佑は答えた。

そのとき、その前のおばあちゃんの家の一角でやってるクリーニング屋に客がきた。

「おばーちゃん、これ頼むわ」客は店の中に入る。

おばあちゃんは手を留めて、「ちよつと待ってて」と叫ぶとそそくさと店の方に入っていった。

「おばあちゃん、この歳でまだ仕事してるんや」佑は心の中でつぶやいた。仕方なく、この老婦人の跡を追ってクリーニング屋に入った。

「あんた、エンドさんやったね」おばあちゃんは伝票にエンドと力タカナで書きながらいった。

「いつできる？」男は伝票を受け取りながらきいた。

「木曜日、あさつての夕方にはきてるから」

佑は「おばあさんこの歳になってまで働かなあかんぐらい苦労してるんやな。そんであそこにトマト植えてるんか」などと独り合点した。

「おばあちゃん、一人暮らしですか？」 佑が尋ねる。

「いや、子供がおる。一人は結婚して外に出てるけど、ひとり家は家にいる」

「そうですか、それは寂しくないですね……」 見当が外れたと思いながら、続けた。

「ところで、あのトマトのことなんですけど、とってもよく育つてますね。ただ、あそこの土地はこの町のもので、申し訳ないけど……」 佑はそれに続ける言葉が見つからなかった。おばあさんがとても大事にしているのが分ったからである。

「あのトマトはよう育つてる。初めあの土地は枯れててとうにもあかんかったん。いい土を入れたら、いまではよう育つようになったわ。あと二ヶ月もしたら、熟れたトマトがてきるやろ。あんた、そんなにトマト好きやったら、そんなときはおすそわけせないかな。ところで、あんたなんて言う人？」

すっかり言いそびれて、佑はポケットから名刺を出して渡した。

「関本佑と言います。役場の環境科に勤めています」

おばあさんは老眼鏡も使わず、名刺を眺めたが、「あかん、漢字は読めん」と言っつて、佑に名刺を返した。

「失礼ですが、おばあさんは地の方ですか？」 佑は気になっていたことをおそるおそる聞いた。

「いや、ここに来てからはもう30年ぐらい。その前は高槻におつ

た。でも、生まれたのは韓国や」

「なるほど」と佑は腑に落ちた。それで、おばあさんの発音が少しおかしかつたわけだ。

「あんだ、大卒で役場に入ったの？」

思わぬ質問に少しとまどいながら、「はい、そうですが……  
」と答えた。

「そりゃーええところにお勤めやな、まあかんばりや」

佑は自分が近頃この仕事をおもしろくないと感じていることをおばあさんに見透かされたような気がして少し赤面した。

「はい……」

役所に帰って、係長に連絡した。

「へー、あの前に住んでるおばあちゃんが犯人か」荒井係長が言った。

犯人って言うほどのことかと、心で少し腹が立ったが、佑は顔には出さずにいた。

「それで、おばあちゃんは立ち退きに納得した？」

「はあ、それが……」

「それが、なに……？」 荒井は丸眼鏡の中から佑の顔を覗き込みながら言った。

「それが、ちょっと言いそびれてしまいました……」

「はあ？」 荒井はちょっと声を裏返ししながら、切り返した。

「ちょっと、事情が複雑そうな方だったので」 佑は曖昧な言い方をした。

「でもな、関本君、君はあの土地を立ち退かせるためにいったんやる？ そんでなんでそれを言わへんの？」 荒井は佑をあきれ顔で見ながら「まあ、今度行くときはちゃんと立ち退いてもらってな」と言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1696o/>

---

路傍の蕃茄(トマト)

2010年10月12日15時36分発行